

源氏物語の絵と歌と玲さんをめぐって

高橋 亨

ここしばらく、久富木原玲さんとお会いしていない。学部長職でご多忙だったり、ブラジルなど海外にいらっしゃったりということ、いつの間にか時が流れ、愛知県立大学を定年でご退任なさることにまつわる文章を書くことになってしまった。

今は昔、愛知県立大学は名古屋市昭和区の桜山近くにあった。その頃、二十代半ばから三十歳ごろの私は、名古屋大学教養部の専任講師として赴任したあと、愛知県立大学短期大学の非常勤として通ったりもしていた。愛知県立大学と私との関係は、久富木原玲さんとの年齢の差よりも、ずっと以前から続いていた。その頃の愛知県立大学には、今は熊本にいる森正人さんや、京都にいる赤瀬信吾さんもいた。ともに若き頃の呑み仲間かつ研究の論議仲間で、他の友人も交え、県大国文科の学生たちを引率した熊野湯の峰までのバス旅行に便乗し同行したこともある。

愛知県立大学における久富木原玲さんとの関係は、そうした昔話

にくらべれば、ごく最近のこととなる。久富木原玲さん、そしてかつて名古屋大学文学研究科の学生であった中根千絵さんと並んで、『武家の文物と源氏物語―尾張徳川家伝来品を起点として』（翰林書房、二〇一二年）の編者に加えていただいたことが、貴重な経験として、まず想起されてくる。同書には、久富木原玲・高橋亨の連名で、「愛知県立大学蔵「源氏物語色紙」紹介と解題」が載せられており、私も単独で「清原雪信の「源氏物語画帖」とその画風」という論文を書かせていただいた。

同書に、中根千絵さんは「愛知県立大学蔵版本『古今著聞集』の挿し絵」という論文を書いている。これに関連しては、私が二〇一三年に名古屋大学国際言語文化研究科の伊藤信博氏の紹介で調査した、パリ・チュルヌスキー美術館蔵の奈良絵本『古今著聞集』についての報告がある。論文としては未刊なのだが、古代文学研究会の場で発表し、そこに引用する基礎研究となったのが、この中根論

文である。ちなみに、この豪華な奈良絵本『古今著聞集』は、現存する世界で唯一の作例であり、早急にカラー図版で紹介したいと願っている。また、名古屋大学図書館の小林文庫にも『古今著聞集』の多くの写本や版本がある。

そもそも、カラー図版をふんだんに用いて豪華でありながらも廉価なこの書物の出版は、二〇〇七年度から二〇一一年度に渡る科学研究費補助金基盤研究（S）による、「戦（いくさ）」に関わる文字文化と文物の総合的研究」の成果発表の一環で、研究代表者は愛知県立大学日本文化学部名誉教授の遠山二郎氏であった。「戦（いくさ）」に関わる文字文化と文物」というテーマと「源氏物語」との関係は、一見すると奇妙なようだが、「尾張徳川家伝来品」が両者を媒介する企画であった。

徳川美術館に国宝の「源氏物語絵巻」があることは有名だが、尾張徳川家の蓬左文庫にも、尾州家本といわれる徳川家康旧蔵の河内本「源氏物語」写本がある。家康が、やはり征夷大將軍として統治した源頼朝による鎌倉幕府のもとで作成された「源氏物語」の大型豪華写本を所有したのは、恋物語として読んで楽しむためではない。征夷大將軍としての「源氏」を名乗るためであり、「源氏」としての宝器が必要だったからである。

大阪夏の陣で勝利する前に、すでに家康は源氏学と歌学の権威た

る公家たちから、「源氏物語」の講義を受けている。ちなみに、国宝の「源氏物語絵巻」の方は、江戸時代の婚礼調度として鷹司家あたりの公家から入手したらしい。この他にも、徳川美術館と蓬左文庫には、土佐光則や土佐光吉の絵に、公家の寄合書の色紙を組み合わせた「源氏物語画帖」など、多くの源氏絵や王朝物語絵や貴重本が所蔵されている。徳川秀忠が詞書を書いた「源氏物語画帖」もある。

私が、これらの名品などに比べてみれば地味な、清原雪信画「源氏物語画帖」を取り上げたのは、雪信という女性画家に興味があったからで、たまたまそれが徳川美術館に所蔵されていたからである。私の予測に反して、それは徳川美術館ではなく尾張徳川家の個人蔵であったため、カラー図版ですべてを載録することはできなかった。その詞書の色紙は、やはり五十四人の公家たちによる寄合書である。

この「源氏物語画帖」そのものについては、やはり同書に「近世武家女性の源氏絵享受―徳川家周辺を中心として」という論文を書いている吉川美穂氏の、旧姓岩田時代の論に詳しい。私の論は、この機会に便乗して清原雪信論を展開したもので、架蔵のいくつかの雪信作品もリストにあげつつ、カラー図版にまぎれこませていただいた。清原雪信は、久隅守景の娘で、母は狩野探幽の姪、探幽門

下でありながら、二十歳ごろにやはり探幽門下の男と出奔し、その後、京都で活躍した、謎の多い女性画家である。

それにしても、「戦（いくさ）」に関わる文字文化と文物の総合的研究」という科学研究費の成果発表として『武家の文物と源氏物語』という書物を出版できたことは、『源氏物語』研究史の上でも絶妙なタイミングであった。近年、やはり徳川美術館に桐壺三巻が寄託されて展示もされた「幻の源氏物語絵巻」（あるいは「黄金の庭絵巻」とも）など、十七世紀の源氏絵や王朝文化の作品享受について、画家と武家との関わりの深さが、ますます注目されつつある。この書物の企画については、私が徳川美術館の学芸員の方々と親しかったこともあるが、『平家物語』や軍記物語などではなく、『源氏物語』を中心としたのは、やはり久富木原さんと私の研究分野が、『源氏物語』を中心としていたからである。

久富木原玲さんが私を巻き込んでこの書物を出版したことは、その発想がいささか強引でトリッキーであったにせよ、実に重要であったと自画自賛しておきたい。久富木原さんが大学院生であった頃から、物語研究会などで、私は交流があった。久富木原さんの専門は平安朝から中世にかけての和歌と『源氏物語』などの王朝文芸であったから、研究仲間と言ってもよいのだが、在住する土地が九州と名古屋であったことなど、離れている時期が多かった。

愛知県立大学に着任されてからの交流で、もうひとつ忘れたいのは、二〇一四年三月の、フランス国立東洋言語文化大学（INALCO）における国際シンポジウム「詩歌が語る源氏物語」にご一緒したことである。久富木原さんは、二十一日の第一セッション「物語歌の底流」の中で、『源氏物語』の笑いの歌の地平——近江君の考察から」を発表した。私は同日午後の第二セッション「和歌という枠組み」の中で、フィレンツェ大学の鷺山郁子氏「源氏物語」と「古今和歌集」——引歌・歌語の種々相」のディスカッションを務めた。

パリ INALCO の国際シンポジウムでは、すでに二〇一〇年三月に、私が「源氏物語の語り手と〈作者〉」という発表をしていた。それに基づいた「源氏物語」をめぐる語り手と作者の系譜」という私の論を含む、パリ・源氏シンポジウム論集『物語の言語——時代を超えて』（青簡社、二〇一三年）が出版されている。こうした海外における学会などの機会を利用して、私はパリのフランス国立図書館やギメ美術館、チェルヌスキー美術館など、海外に所蔵されている貴重本の調査も続けてきた。

パリ・源氏シンポジウムの実質的な企画と運営は、INALCO の寺田澄江氏がその中心を担っていた。二〇一四年の国際シンポジウム「詩歌が語る源氏物語」の発表者の一人として、寺田氏から頼

まれ、私が久富木原玲さんを推薦したのだった。もともと、そこに私が招かれてはいなかったのだが、海外旅行は不慣れで心配だから同行してほしいと久富木原さんに頼まれて、私も行くことになったのだ。どうせ押しかけて来るのならと、急遽ディスカッサントという役割を与えられたのだった。この時も、フランス国立図書館蔵の、源氏絵・伊勢物語絵・歌仙絵の調査などを行っている。

この調査には、久富木原さんとともに、私の妻の妙子も同行している。オルセー美術館などの見学も一緒だった。久富木原さんはハイヒールで歩くのが遅く、スニーカーを穿いた私たちは、置き去りにしないか心配だったりした。また、オルセー美術館では、クルベの「世界のはじまり」だったかの絵に反応した、久富木原さんのとっさの叫び声も忘れがたい。要するに、いつまでもお嬢様の氣質をひきずった部分があった。

そうした久富木原玲さんが、最近お会いできないのはブラジルで過ごしておられるからだと言ったのは、パリ行きを不安がっていた時と比べて、隔世の感がある。名古屋大学に着任して間もなく、私にもサンパウロ大学の講師として行かないかという誘いがあったのを、お断りしてしまった悔いがある。ブラジルの体験に基づいて、レヴィ・ストロースは「悲しき熱帯」を書き、その後の「構造主義」に関する翻訳書などを、物語研究会時代の私たちは学んだのだった。

フランスから自由の女神を贈られ、自由・平等・博愛を理想としていたはずのアメリカ合衆国をはじめ、現代の世界は混迷を深めつつある。「構造主義」から「ポストモダン」の思潮を経て、久富木原玲さんとの新たな未来を予祝し楽しみにしつつ、この雑文を終わることにする。